被災地で行われる結婚式の意義と可能性

～東日本大震災の事例を通して～

指導教員　田中 正人

19jj166　今井 美有

<目次>

第１章　研究の背景と目的　・・・・ｐ4

１－１　研究の背景

１－２　研究の目的

第２章　研究の方法　・・・・ｐ7

２－１　対象地区の概要

２－２　調査の方法

第３章　ウエディングの歴史と東日本大震災　・・・・ｐ10

３－１　ウエディングの歴史

３－２　東北地方での結婚式と震災による被害

（1）東北地方の昔ながらの婚礼

(2)東日本大震災による式場の被害

第４章　結果　・・・・ｐ16

４－１　事例１

（1）結婚式までの背景

（2）結婚式当日

（3）結婚式に対する各々の考え

（4）結婚式に対する考えの変化

４－２　事例２

（1）結婚式までの背景

（2）結婚式当日

（3）震災後の結婚式と運営者としての思い

（4）結婚式を振り返って

４－３　事例３
（1）被災から公開結婚式参加まで
（2）公開結婚式当日
（3）結婚式後の生活
（4）結婚式を振り返って
４－４　事例４
（1）ボランティア団体参加と活動
（2）唐桑町と夫との出会い
（3）Ｏ氏の唐桑町への思いと御崎神社での結婚式
（4）気仙沼市の文化と披露宴
（5）街全体で作り上げた結婚式
（6）結婚式に対する各々の思い
第５章　コミュニケーションの場としての結婚式　・・・・ｐ31
５―１　長年背負った苦しみとコミュニケーション
５－２　一人じゃなかったからこそ前を向けたこと
（1）避難所生活と笑い声
（2）被災者と非被災者
第６章　考察　・・・・ｐ35
６－１　生活再建のきっかけ
６－２　コミュニケーションの場
６－３　被災者にとって共有できる大切な記憶
第７章　結論　・・・・ｐ40
７－１　まとめ
７－２　今後の展望

<第 1 章>

研究の背景と目的

１－１ 研究の背景

本稿は、被災地で行われる結婚式の意義と可能性について考察するものである。

全国各地において、毎年のように震災や土砂災害など自然災害による被害を受けている。その中でも 2011 年３月 11 日に起きた東日本大震災では、多くの人が未曾有の被害を受け、恐ろしい光景を目の当たりにした。その被害は、東北地方を中心に死者１万 5,900 人。行方不明者は、2523 人に及ぶ(警察庁、2022)。

東日本大震災以降、復興のための活動やコミュニティの育成など、様々な取り組みが成された。その中でも被災地の冠婚葬祭に関しては、梅原・沼田・目黒(2014)によると、「仮埋葬は宮城県の 6 市町(石巻市、東松島市、気仙沼市、山元町、亘理町、女川町)で実施された。6 市町で合計 2,108 体の遺体がいったん土葬され、2011 年 11 月 19 日までにその全てが改葬された」とある。また、改葬については「埋葬した遺体を掘り起こして別の埋葬地に移し、供養するという意味である」と述べている。

次に植田(2013)によると、「相馬の野馬追の担い手にとって、「角突き」や「野馬追」は欠くことのできないハレの時間であっただろう。そのような祭礼であれば、被災前まで繰り返されてきた生活をあらゆる世代に雄弁に喚起し、ハレとしての祭礼と表裏一体を成すケの日常生活を

つくりだすうえでも力をはっきする可能性を秘めている」とある。

これらのように被災地とお祭り、弔いなどは今までもいくつか研究があり、議論の蓄積がある。しかし、その中で、被災地での結婚式に関しては、今までほとんど取り上げられていない。もともと予定していただろう結婚式が、震災などの自然災害によって実施できなくなってしまったケースは少なくない。未曾有の災害によって結婚式どころではなくなった人もいるのではないだろうか。後述するように、そんな中であえて被災地での結婚式を催すカップルやそれを支援する団体・会社があったことも事実である。

１－２　研究の目的

ではいったい、結婚式における意義とはそもそも何だろうか。彭永成（2020）によれば、「2016 年から毎号結婚式は幸せな新生活に繋がる結節点として重要な意義を持つこと、式を挙げることは両親にとっても生活の結節点として重要であること～後略～」とある。また、「～前略～結婚式の意味合いは「新生活への通過点」にすぎなかった」とも記している。結婚式とは、自身の新生活の為であり、同時に両親にとっての大切な節目であるということが考えられる。

では、東日本大震災後、結婚式の位置づけはどのように変化しただろうか。おそらく震災後、家族や友人とのつながりが強制的に絶たれ、再び関係を作り直すための多くの対策が成されたと考えられる。一方、結婚式という非日常のイベントもまた、そうした繋がりの再生の機会となり得たのではないだろうか。

被災地での結婚式は、場所の確保や周りへの配慮など、普通の結婚

式に比べて開催することが困難であり、反感を買う可能性もある。しかし、その中で結婚式をあえて被災地で実施する意義は何だろうか。本稿では、2011 年東日本大震災後、実際に被災地で行われた結婚式を事例に、参加者が日常を取り戻していくひとつのきっかけとしての結婚式の意義を明らかにする。ここで「日常」とは、仕事など生活の基盤が整っていること。前向きに今後の生活再建を考えられる気持ちの余裕を持ち合わせていることを指すものとする。

<第２章>

研究の方法

２－１　対象地区の概要

本稿は宮城県気仙沼市と岩手県大槌町を調査対象とする。

宮城県気仙沼市は、宮城県の北東端に位置する。令和 4 年 10 月末日の住民基本台帳人口は 59,141 人で、世帯数は 26,254 世帯からなる市である。気仙沼市の 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災による被害は１,４３３人(直接死 1,109 人、関連死 110 人、行方不明者 214 人)、また被災世帯数 9,500 世帯におよぶ(気仙沼市、2022)。

次に岩手県大槌町は、上閉伊郡に所在する。陸中海岸中央から少し南に位置し、東側は太平洋に面している地である。大槌町は総人口 10,964 人、総世帯数 5,288 世帯からなる町である。(大槌町、2022.11.30 現在)大槌町の 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災による被害は 1,286 人(身元判明者数 821 人、行方不明者数 413 人[1)]＋関連死 52 人)におよぶ(大槌町、2020)。

図１　調査対象地(宮城県気仙沼市、岩手県大槌町)の位置

(出所)国土地理院

２－２　調査の方法

主な調査の方法としては、まず既存の資料や文献をもとに、ウエディングの歴史と災害関連について概要を把握する。その上で、インタビューによって被災地での結婚式はどのように開催され、式に参加した人々がどのような影響を受けたのかを調査を基に明らかにする。

対象者は、気仙沼市の結婚式に運営者として参加したカメラマンのＳｗ氏(2021 年 10 月 15 日)、大槌町で結婚式を挙げたＵ夫婦(2022 年 8 月 31 日)、震災以前の結婚式の状況に詳しい、元ホテル望洋社長のＫ氏(2022 年 9 月 2 日)、結婚式に関わってはいないが、一被災者として震災後の避難所生活を送ってきた St 氏(2022 年 9 月 2 日)、式の運営者として関わったプラザホテルのＳ氏(2022 年 9 月 3 日)、ボランティアとして東北へ行き、そこで出会った気仙沼出身の人と結婚をした当事者であるＯ氏(2022 年 11 月 30 日)の計６名である(表１)。Ｓｗ氏に関しては電話で一時間半程度話を伺った。Ｕ 夫婦と Ｏ 氏に関しては、

zoom にて一時間半程インタビューを行った。残りの３名は直接訪問の上、対面でインタビューを行った。

表１　インタビュー対象者リスト

結婚式の運営者				
	性別	年齢	元居住地(震災時)：居住地(現在の)	詳細
Sw 氏	男	n.a.	n.a	依頼を受けてカメラマンとして式に参加
S 氏	男	40 代	気仙沼市：気仙沼市	プラザホテルに勤務。運営者として式に関わった

結婚式の参加者				
	性別	年齢	元居住地(震災時)：居住地(現在の)	詳細
U 氏	男	40 代	3 か月の避難所生活と大槌町の空き家：復興住宅(一戸建て)	大槌町で結婚式を挙げた夫婦
A 氏(U 氏の妻)	女	50 代	上記に同じ	上記に同じ
O 氏	女	30 代	奈良県：宮城県気仙沼市唐桑町	ボランティアで気仙沼市へ行き、現地の人と結婚式を挙げた

その他				
	性別	年齢	元居住地(震災時)：居住地(現在)	詳細
K 氏	男	60 代	気仙沼市：災害公営住宅	元ホテル望洋の社長
St 氏	女	20 代	気仙沼市：シェアハウス(気仙沼)	震災の一被害者

<第３章>

ウエディングの歴史と東日本大震災

この章では、主に戦後の婚礼を行う場所の変化と背景、それらを踏まえた上で東北地方の結婚式について記す。またそれらが東日本大震災でどのような被害を受けたかについて記していく。

３－１　ウエディングの歴史

斉藤(2006)によると、敗戦直後まで日本の婚礼の大半は自宅結婚式だった。それが 1950 年代以降で激減し、専門の式場やホテルで行われる神前結婚式と披露宴をセットとした婚礼スタイルが普及した。そして 1964 年の東京オリンピックを機に建設されたホテルが結婚式市場に参入し、その後婚礼スタイルの 80%以上が神前結婚式となっていった(斉藤、2006：57)。

この背景として、戦後の高度経済成長期は「多婚小死」の時代であった。1960 年代後半から 1970 年代後半にかけて、1940 年代に生まれた団魂世代(ベビーブーマー世代)が結婚年齢に達した時期である。そのため、その親世代が戦後の乏しい時代でまともな結婚式を挙げられなかった両親は「せめて息子には立派な結婚を挙げさせたい」と考えた。そこで選ばれたのがホテルでの神前結婚式であった。この時代の人々は兄弟も多く、親戚一同が集まる結婚式では神前結婚式場にちょうど良い人数だった。この時代に神前結婚式が流行ったのは、神前結婚式と披露宴が合わさった婚礼スタイルが、この時代に一番合っていたためである(斉藤、2006：60-63)。

1970 年から 80 年代にかけて、結婚観が変わり始めた。1970 年代の初頭、ウーマンリブ[2)]が結婚制度に意義を唱えた。その後、「結婚しない女」や「女の自立」が女性誌上をにぎわせた。この頃から、結婚は必ずしなくてはいけないものから、してもしなくてもいいものへと徐々に変化し、晩婚化にも拍車がかかり始めた(斉藤、2006：76)。

そこから時代が流れ 1990 年代の中盤、神前結婚式の急速な人気下落とキリスト教式結婚式の人気上昇が起こった。そして、1995 年から 96 年についにその比率は逆転する。協会が中心となっていた結婚式は、ホテルなどが礼拝堂を併設するようになって以降、「チャペルウエディング」として婚礼スタイルが普及していった。結婚情報雑誌『ゼクシィ』の 2004 年の調査によると、チャペル式の婚礼スタイルが 74.2%、人前式が 15.2%、神前式がさらに少ない 8.2%となっていた。神前式はあっという間に過去の風物詩となり、晩婚化が進んだことで結婚する二人が自らの主体性を通せる新たな結婚観となっていった。これらは、一面から言えば冠婚葬祭のファッション化である。また、この頃から式を挙げずに婚姻届けだけを出す地味婚も増えていった(斉藤、2006：81-84)。

時代は平成前期、杉浦(2021)によると結婚式で流行りとなっていたのは「アットホーム婚」だった。アットホーム婚について杉浦は「主にゲストハウスなどの一軒家を貸し切ってゲストを招待して行うことにより、新郎新婦とゲストとの距離が近く、プライベートの色合いを増してきたものである」と述べている。

また、2010 年以降になるとアットホーム婚から変化し、「アットハート婚」というスタイルが登場した。杉浦はアットハート婚に対して

「今までの新郎新婦が招待客から祝福されるといったスタイルではなく、新郎新婦が招待客に感謝を伝えておもてなしをするというスタイルのことを指す」と述べている。2011 年の東日本大震災後、日本中の人が震災によって人とのつながりを見直すきっかけとなり、この年の結婚率が増加した。また、この年を表現する漢字一文字が「絆」であったこともあり、「絆婚」とも呼ばれ、「アットホーム婚」が増長された。

この婚礼は、式を挙げる新郎新婦が主役というこれまでの定義とは違い、新郎新婦にとって大切な人にこれまでの感謝の気持ちを伝える節目の日として主眼が置かれた、時代に合ったスタイルだった。

３－２　東北地方での結婚式と震災による被害

(1) 東北地方の昔ながらの婚礼

このような震災前後の結婚式について日本の背景があった中で、直接被害を受けた東北地方ではどのような婚礼スタイルだったのだろうか。

公式な記録ではないが、東北地方の結婚式について記していく。東北地方の結婚式では風習として「仏壇参り」がある。いわゆる「結納返し」のことを指す。また、新郎側から送られる結納品のお返しとして「進参状」(お嫁に参りますという文言をしたためたもの)を持ち、新婦家が新郎家に挨拶に行くという習慣も残っている地域もある。他にも「一生水の儀」といって、玄関で一升マスのなかから土器の器で水を飲み、家の水があうようにという意味が込められた風習などもある。これらのように、仙台市では江戸時代からの独自の風習が今でも残っている。また披露宴に関しても、現在では式場やホテルが主流となっているが、昔は新郎家で行われていた。新郎家のお付き合いを大事にしていたこと

で参列者も多く、大人数での披露宴が当たり前だった。その名残からか、新郎新婦が質素な結婚式を望んでも、両親からの提案によって列席者が予想外に多くなってしまう婚礼がたくさんあるようである（WOMDER PAIMT)。宮城県で行われた結婚式のうち、半数以上はゲストが 100 人を超える大規模な結婚式となっている。この理由として、新しい人生の門出を盛大にお祝いするという意識が強いことが挙げられる。また、家と家との結びつきということで親類縁者だけではなく、友人知人も多く招くことも一つの理由となっている（COCOSAB)。

このように、東北地方では昔ながらの結婚式やその伝統が残っていることに加え、新郎新婦よりも両親の意見が優先されてきたと言える。結婚式は新郎新婦の為にするというよりも、両親や親族のためにするという考えが強いということがわかる。

また震災前後についてＫ氏の証言によると、気仙沼市では昭和 40~50 年はＫ氏が勤めていたホテル望洋が一番大きく、結婚式を挙げる人がとても多かった。

その後段々少子高齢も進み、式を挙げる人も減ってきていた。また時代の変遷とともにホテルからチャペル等が主流に変わっていき、総裁会場や結婚式場が気仙沼市にもできてきた。しかし震災前、気仙沼は観光地として発展途上だった。気仙沼市に建てたホテルは、最初は良かったが段々厳しい状況になっていった。人員を減らすなどの工夫をしたが、気仙沼は観光の望みや行き先が望めないと感じている中で震災が起こった。そもそも結婚式自体、晩婚化が進む中での震災だったため、決してブライダル市場が潤っている状態ではなかった。他にも気仙沼市は保守的な場所であるため、親戚がみんな集まり 100 人前後になる昔ながら

の伝統的な婚礼を行っていた。しかし震災後、家族だけでやるという少数での結婚式の形態となった。みんなが被災した状況であるとともに、結婚式にはお金がかかってしまうことがその理由である。新聞で結婚したことや震災の 1 年目・震災当日に子供が生まれたなど、明るい話題が出だしたのも１，２年後のことだったという。

（2）東日本大震災による式場の被害

東日本大震災で多くの式場が被害に合い、様々な影響を受けたと言える。

その中でも、宮城県三陸町にある高野会館は震災遺構として、現在も震災当時のまま建物が残されている。高野会館は、震災以前まで結婚式場として多くの人に利用されていた。東日本大震災当日、建物の 3 階と 4 階にも上る津波が高野会館を襲った。当時、老人会の催しが開かれていたが、従業員の誘導のもと 327 人全員が震災から免れた。

現在は民間の震災遺構としてホテル観洋が自助努力で保存を続けている。女将の阿部憲子氏は「被災した建物にはメッセージがある。多くの人が助かったからこその教訓があるはずだ」と守っていく意思を強く遺構に取り組んでいる(産経新聞、2019.3.10)。

図１　震災遺構となった高野会館

（出所）筆者撮影（2021 年 12 月 2 日）

上記はあくまで一例であり、多くのホテルや結婚式が東日本大震災によって多大な被害を受けた。今までたくさんの人が結婚式を実施する際に利用していたホテルや式場は、一瞬にして人々の命と日常と共に奪われたのである。

<第４章>

結果

では震災後、東日本での結婚式はどのようにおこなわれていたのか。また、震災後のまだ周りの環境が整っていない中で結婚式を行うことにはどのような意義があるのか。インタビューを行った事例を通して読み解いていく。

４－１　事例１

(1)結婚式までの背景

まず初めに、カメラマンのＳｗ氏のインタビューの事例を元に読み解いていく。Ｓｗ氏は東日本大震災の前から、結婚式のフォトグラファーとして仕事をしていた。そんな中、東日本大震災直後に 1 人の女性から「写真を撮ってくれますか？」と仕事の依頼が入った。Ｓｗ氏は神奈川県から車で 12 時間程かけ、気仙沼へ向かった。

依頼があったのは 2011 年 4 月ごろ、震災から約 1 か月程だった。そして、依頼日は 2011 年 5 月。結婚式は震災から約 2 か月という、まだまだ周りの様子は再建もままならず、ライフラインの普及もままならない状態だった。

(2)結婚式当日

結婚式を行ったのは、気仙沼市の公民館だった。その建物は高台にあり、瓦屋根等は落ちていたが十分結婚式を行える環境だった。結婚式当日、来てくださった方を承認とし、人前式や持ち寄りの料理、用意し

たお菓子などで交流会のような、謝恩会のような雰囲気だった。結婚式は、夫婦とその両親・幼馴染・近所の人の総勢 30~40 人ほどが中心となって開催された。参加者は常時 10 人前後、人前式には 20 人程参加していた。朝から昼過ぎにかけて、約 2，3 時間の開催だった。気仙沼では、5 月とはいえまだまだ寒い時期だった。空席はたくさんあったが、この寒さの中でこれほど多くの人が参加したのはとても良い方だったのではないかとＳｗ氏は語っていた。

(3)結婚式に対する各々の考え

その中でも、来てくださった方を承認とはしていたが、参加者の中には不満な表情でただ座っている人もいれば、文句を言う人もいた。また、参加していない人の中でも批判を言う者や「うるさい、近所迷惑だ」と警察を呼ぶ者までいた。震災から 2 か月後ということもあり、半数くらいの人は「不謹慎だ」と言う言葉を投げかけていた。

これほど多くの反感をかった大きな要因として、夫婦が震災当時に親戚の葬儀で福岡にいたことが関係している。東北の人はもともと地元愛が非常に強く、上京した人や U ターン者に厳しいという。それに加え、偶然とはいえ、震災を経験しなかった人に対して「あなたに何が分かるんだ…。経験をしていないのにこの辛い気持ちはわからない」という感情が大きくなったのではないかと考える。このような要因が重なり、結婚式は大きな反感もあり、決して一般的な明るいものとは違う形となってしまった。

そもそも、なぜこの時期に式を実施するのだろうか。当時Ｓｗ氏は夫婦に尋ねると、「この時期じゃないとだめなんです」としきりに語って

いたという。また、「1 人でも多くの人が笑顔になれば良い」とも言っていたそうだ。おそらく、震災によってもたらされた非日常と大逆的な結婚式という良い非日常である結婚式を行うことによって、被災した誰か 1 人でも笑顔になってほしいという思いを込めて式を実施したのではないかとＳｗ氏は語った。

震災によって心に余裕をなくしてしまった人には、何をしても悪い事を言われてしまう時期だとしても行動をすることが大切だった。また、夫婦は被災者から反感をかってしまうことも分かっていた。

(4)結婚式に対する考えの変化

この式に対する風向きが変わったのは、1，2 年後経ってからだった。当時参加した人に「やってよかった。2，3 時間とわずかな時間でも笑える時間になった」という意見が出てきたという。この式を挙げた夫婦も、この当時結婚式を挙げたことに対して、一切後悔はないという。

結婚式は、当時は大きな批難を受けたが、数年たって被災者に心に余裕ができて報われたのではないかと考える。この式は決して夫婦の為の結婚式ではなく、被災者の為だけに開催されたとても温かい、新郎新婦の気持ちがこもった結婚式だったのではないだろうか。

４－２　事例２

(1)結婚式までの背景

次に、プラザホテルにお勤めの S 氏の事例を記していく。S 氏は東日本大震災以前からプラザホテルに勤めていた。東日本大震災後、ホテルの営業が一時的にできなくなり、今後の見通しも立たないままホテル

の片付けや営業の準備を行っていた。幸い、プラザホテルは高台にあったため、津波からの被害は免れることが出来た。

そんな中、結婚式を挙げたいと１組のカップルから依頼があった。依頼を受けたときは、まだ市場も何も動いていない状況だった。また、チャペルのステンドグラスが粉々に割れているなど、ホテル内も外も営業ができる状態では決してなかった。業者や料理人など多くの人に連絡し、何とか 2011 年 5 月 28 日に結婚式を無事実施することができた。震災後約２か月後であり、水も電気も復旧したばかりの本当にギリギリの開催であったと言える。

(2)結婚式当日

結婚式は、親族のみの少人数での開催だった。

S 氏にとって、この結婚式が震災後初めての仕事となった。直接結婚式に関わったわけではないが、同じホテルの社員として最善を尽くした。

なぜ、このカップルは東日本大震災の復興もままならない中で結婚式を行ったのだろうか。S 氏によると、「もともと結婚式を予約していた可能性や当時の結婚式はやりたくてもやれない状態で、非常に勇気の必要なことだったと予想する。そんな中でも実施するということは、立ち直ろうという気持ち、普通の生活を取り戻したい、明るい話題提供をしたいなど少しでも普通にありたいと思ったからなのではないか」と語った。

(3)震災後の結婚式と運営者としての思い

震災後、結婚式を行う人は大きく減り、年間３０から５件程に減っ

たそうだ。その代わり籍だけを入れる人は多くいた。その理由として、住居が無くなってしまったため、結婚相手が住む別の土地に移動するための手段とする人が多かったためである。他にもお祝い事はできないと避ける人は今でもいるのではないか、またそれに対して年々ねたむ人も増えるのではないかと予想されると語っていた。

ではそもそも、なぜＳ氏は結婚式を引き受けようと考えたのだろうか。Ｓ氏に尋ねると「震災前は実は気仙沼の事が好きじゃなかった。しかし、震災によって生活が一変したことに加え、震災によって様々な支援者と出会い、支援者たちが口をそろえて『気仙沼は良いところだね』と語っていた。これらを機に今までの生活がものすごく幸せだったことに気づいた」と語った。そこから、「次第にこの町を復興させたい」という思いや「この町を好きになってもらえる仲間を増やしたい」という前向きな考えが生まれていき、結婚式の依頼も受けたそうだ。

このことから、震災がもたらした影響は悪いものばかりではなく、震災以前のこれまでの日常の幸せに気づく良い影響ももたらしたと言える。

(4)結婚式を振り返って

結婚式後、式を終えた親族・新郎新婦はみんな笑顔だった。Ｓ氏はこの結婚式に対して「普段であれば決して引け目に感じることのない事。しかし、当時は周りを気にして引け目に感じてしまう。その中でも勇気を出してここ(プラザホテル)で実施してもらったことや、間近で一緒にお祝いとお手伝いができたことはすごく嬉しかった。やってよかった」と語った。また、「もともとあったつながりが震災によってもっと強く

なって、みんながみんなで気仙沼のために引っ張り(背中を押し)合っていた。震災があったからこそのつながりがあり、今もつながっている。結婚式に関しても、周りも私も『やれるんだ』という気持ちになった」と話していた。

この結婚式に対して、地域の反応も批判等は特になく、「こういう時だからこそ(明るい話題を)ありがとう」という人もいた。被災状況によって意見が両極端に変わることや、当時は心から祝福していたとしても、時間が経つにつれてその思いが妬みに変わったりすることもあるという。

しかし震災後、暗いニュースばかりが日常の中にあふれている中で、被災者にとって明るい行事である結婚式は今までの日常を取り戻す 1 つの節目になったのではないだろうか。また、S 氏にとっても仕事の再開につながったことや町のために何かをしたいという思いが叶った瞬間だと考える。

図 2　震災時は粉々になってしまったステンドグラス
(出所) 筆者撮影 (2021 年 12 月 3 日)

４－３　事例３

(1)被災から公開結婚式参加まで

次に大槌町に住む夫婦、U夫婦の事例を記していく。U夫婦は実際に震災４か月後の結婚式に参加した。

震災当日、夫婦は別々の場所で被災し、避難所もお互いに離れてしまい、バラバラのまま５日間過ごした。その時Å氏にはお腹に子供がいて、震災時でも避難所生活の中でも泣いている暇はなく、子供を守ろうと必死だった。またU氏は震災時、もともと仕事に使用していた自転車用の工具を持ち出していた。これが後に、U氏にとって腕と心の支えとなり、避難所を周って無料で自転車の修理を行った。震災から 6 日後、夫婦は再開し約 3 か月間避難所を転々とした後に空き家へ移住した。

そんな中、一般社団法人全日本ブライダル協会会長の桂由美氏[3)]が主催する公開結婚式[4)]へ参加するカップルを募集していることを知った。U夫婦はもともと結婚式をする予定ではなかったが、叔母に勧められ応募した[5)]。U氏によると応募には選抜があり、実際は結婚式に応募した人は多かったのではないかと語っていた。

実際に結婚式への応募数は、他県で実施された公開結婚式も合わせて約 120 組の応募があった。その中で当選したのは 45 組だった。(一般社団法人　全日本ブライダル協会)

(2)公開結婚式当日

2011 年 7 月 3 日結婚式当日、10 組のカップルと約 300 人の市民が参加した。場所は岩手県釜石市の鉄の歴史館で開催された。震災から約

4 か月後というまだまだ生活再建が整っていない中での開催であったため、中には避難所から直接結婚式会場へ向かう新郎新婦もいた。

当日は、釜石市内にある岩手ブライダルへ行ってドレスを選び、衣装もメイク、指輪も写真も全てプレゼントだった。式の途中で専門学生の人たちが作ったケーキをカットしたり、芸能人も来てくれたりなど、様々なサプライズもあった。この結婚式に対して、U夫婦は「とても良い結婚式だった。来た人も喜んでくれたし、お祝いの言葉も嬉しかった。やってよかった」と語っていた。

(3)結婚式後の生活

結婚式の約 3 か月後、U氏は震災前からもともと営んでいた自転車屋を再開した。しかし開店当時は、支援物資で自転車は皆もらっており、全く売れなかった。U氏はこの当時について、「一日でも早い再建、復興に向けての思いや努力にも関わらず、『修理だけしていれば？』と心無い声も多くあった。悔しかった…」と語った。しかし、その中でも結婚式を挙げたことによって震災以来会えなかった知り合いから結婚祝いを持ってきてくれる人もいた。U氏は「もし結婚式がなければ知り合いの再会を果たすことが出来なかったかもしれない。この瞬間が結婚してよかったと思える瞬間だ」と語っていた。

(4)結婚式を振り返って

この当時の結婚式について、U 夫婦は「代えがたい思い出。普通の結婚式ではないありえない式ができた。大変な中だったけどありがたいし、みんな笑顔になっていたのが良かった。また、何もないより、当時

の写真を見せて子供たちに思い出を語ることができるのが、良かった」と語っていた。また U 夫婦は結婚式当日、新郎新婦挨拶で「子供たちが少しでも住みよい環境になるようにがんばりたい」と語った。

その数か月後、A 氏は無事に出産した。被災地で震災後初の双子の誕生だった。U氏の母は、「震災の中でも、家族が増えたことは幸せなこと。暗い中での明るいニュースを聞けて良かったと友人や周りの人に喜んでもらえて嬉しかった」と語っていた。

被災地での結婚式は一般的な結婚式とは違い、それぞれに何かを抱えている人ばかりである。中には家がない人や親族を亡くした人もいる。しかし、結婚式は「明るくなれるもの。前向きに人を笑顔にするもの」だと、U 夫婦は笑顔で語っていた。

４－４　事例４

(1)ボランティア団体参加と活動

最後に、唐桑町に住むO氏の事例について記していく。O氏は東日本大震災当時、大学生で奈良県に住んでいた。O氏の父は建設業に務めており、震災直後から東北へ復興のために行っていた。そこから数か月たち、大学夏休みに入ったときに、たまたまＴＶで東北でのボランティア活動があることについて知った。O氏はそのＴＶを見た時に、「こんなボランティアとかあるのか！」と驚いた。家と学校の行き来のみの日常だったこともあり、行ってみようとボランティア団体である、日本財団[6)]に応募した。

応募してから初めての活動は、石巻市だった。そこでは、震災の半年記念として花火を挙げるなど、お祭りのお手伝いのような内容だった。

正直、イメージしていたものとは違って拍子抜けした。しかし、その後に実際に被災した人に話を聞く機会があった。その時に聞いた話の内容や、実際に目で見たタイルだけ・トイレの枠だけ・玄関の階段の部分だけ残っているなど現実味のない現状に、思わず言葉を失った。それはO氏だけではなく、その場にいたボランティアに参加した誰もが同じだった。

(2)唐桑町と夫との出会い

9 月になり、O氏は唐桑町にボランティアで向かった。そこでは、主に瓦礫撤去などを行った。地元の奈良県と唐桑町との行き来ではあったが、毎月のように通った。毎回 20 人程度で活動を行い、まるでサークルに通っているように感じ、充実感もあった。そんな時、ボランティア団体の拠点で気仙沼市出身の今の夫と出会った。そこから日時が過ぎ、2012 年の 3 月に付き合った。付き合ってからボランティア活動はなくなってしまったが、唐桑町の人たちとのつながりができたこともあり月に一度程、別のボランティアで通いながら彼氏と気仙沼の地域の人と会っていた。

(3)O氏の唐桑町への思いと御崎神社での結婚式

その後、大学卒業を機に、2014 年に気仙沼市へ移住した。最初はシェアハウスで住み、約 2 年間は付き合いながら働きながら過ごしていた。そこから日時が経ち 2016 年 3 月 12 日、震災からちょうど 5 年と 1 日たった日に入籍した。O氏はこの当時について、以下のように語っている。

「震災があったからこそここにいるけど、震災があったからここに来たということを忘れたくない。今自分が幸せな暮らしをしているけど、震災があって、辛い思いや悲しい思いがあったいままでの人のがんばりがあった上で私は幸せになれると考えたいという思いでこの日に籍を入れた」

また、「震災の 6 年目を新しい日としたいという思いのもと、この日を選んだ。私が移住して結婚して、『良い出会いもあったよね』とおもってもらえたらという思いもあった」と語っていた。

そして 2016 年 11 月 5 日、暖かい快晴の日にボランティアでお世話になった御崎神社[7)]で結婚式を挙げた。この神社ではもう何年も結婚式を行っていなかった。せっかくならお世話になった境内で式を挙げたいと思い、実施した。また、昔ながらある神社で式を行えば地域の人が誰でも気軽に来てもらえると考えた。

(4)気仙沼市の文化と披露宴

気仙沼市は漁師町で、もともと神様事・仏様事を大切にしてきた。冠婚葬祭や縁を担ぐ、神様へのお祈りなどが大切であり、縁起物とされてきた。そのため、O氏が花嫁姿で道を歩いていたら、たまたま通った地元の人が「今日は縁起が良い！」と喜んでもらえた。縁を担ぐことを大切にしているから、花嫁ですらも縁起物となっている文化に、温かみや良さを感じた。

その後、披露宴はホテル観洋[8)]でおこなった。ボランティアでお世

話になりつながりができた人たちなど、地元の人をたくさん呼んで開催した。

(5)街全体で作り上げた結婚式

この結婚式の 2 週間後、地元わかものまちづくりサークル「からくわ丸」とリクルートマーケティングパートナーズが企画制作する「ゼクシィ」監修で、“Wedding made in 気仙沼”という名の結婚式を開催した。この結婚式では、気仙沼市の特色や人と人とのつながりを活かした結婚式であり、「街全体で作り上げた結婚式」である。その名の通り、地元の「オイカワデニム」[9)]を使った新郎新婦の衣装、300 年の歴史を持つ気仙沼の伝統芸能である「松圃虎舞(まつばたけとらまい)太鼓」[10)]の演奏、船での入場、ケーキ入刀の変わりに「メカジキ入刀」など、気仙沼ならではの他にはない唯一の結婚式となった。

(6)結婚式に対する各々の思い

結婚式に参加したのは約 100 人にも及んだ。実際に式に参加した地元の R 氏は、以下のように語っている。

「他人のことを、普通に祝福できる時間はあるようで、なかなか、ない。『おめでとう』は言われる方も、言う方も、嬉しい。唐桑で『おめでとう』をいう相手が増えて良かった。震災があったからこその出会いを、外から来たO氏のことを、被災した人たちが、心から祝福できること。5 年というみんなの日々の結果が、この一日に繋がっていると思ったら、それが、自分でもどういう感情なのか、わからないけれど、す

げー泣けてきた」（りょうすけのありのまま記、2018.11.15.）

また、「今まで黒いネクタイばかりをつけていて、白いネクタイをつける機会がほとんどなかった。白いネクタイをつけられてよかった」と語っていた。

O氏はこの結婚式について、一番は地域の人に喜んでほしいという思いがあった。「O氏が結婚して、こっちに移住してきて嬉しいと思ってもらいたい」、「結婚をするために移住してきたんじゃなく、ボランティアをしたくて、この地域が好きで気仙沼の為に来たという思いを伝えたかった」と語っていた。

また、O氏は大学生の時にボランティアに行きだしたことによって、地元の友達をおろそかにしてしまった。友達同士の飲み会や学校にも全然いけていなかった。そのため、この結婚式に友達を招待することで「大学時代に何度も通ってはまったのは、こういう地域で、こういうおじいちゃんおばあちゃん・子供みんなひっくるめて私はこういう人たちと接してきた」ということを見てほしいという思いがあった。

結婚式から数年経つが、いまでも「あの時の結婚式楽しかったね」と言われることがある。O氏は「決しておしゃれだと言えるものではなかったけど、皆が嬉しそうな、楽しそうな姿をみて望んだ通りの結婚式が出来て良かった」「気仙沼市や地元の友達みんなの共通の思い出ができたことが、結婚式をやってよかったと思える瞬間」だと語っていた。

このように、O氏の思いは結婚式の参加者に届いたと考えられる。友達も含めみんなが「おめでとう」と祝福してくれ、何よりも気仙沼市の人が感動や喜びを感じている。結婚の当事者はもちろんのこと、周囲の

人々にも悲しくつらい思い出だけではない、笑い合える明るい共通の思い出ができたことが分かる。

表２　被災地での結婚式に対する評価の違い

<事例１>	
インタビュイー	n.a.
新郎新婦	この時期じゃないとだめ。1 人でも多くの人が笑顔になれば良い
周囲の人	うるさい・近所迷惑だ・不謹慎だなど、批判的な意見が半数 →1，2 年後、「やってよかった。2，3 時間のこのわずかな時間でも笑える時間になった」という人もいた
友達・家族	n.a.
<事例２>	
インタビュイー	「お祝い事が引け目に感じる時期に、勇気を出してこのホテルで式を実施してくれたこと・そのお手伝いができたことが嬉しかった」
新郎新婦	「立ち直ろうという気持ち、普通の生活を取り戻したい、明るい話題を提供したいなど少しでも普通にありたいと思ったから」(S 氏の意見の元)
周囲の人	「こういう時だからこそ明るい話題をありがとう」
友達・家族	n.a.
<事例３>	
インタビュイー	「参加者も喜んでくれたし、お祝いの言葉も嬉しかった。やってよかった」・「知り合いが結婚祝いを持ってきてくれる。久々の再会が嬉しい」代えがたい思い出。
新郎新婦	上記に同じ
周囲の人	n.a.
友達・家族	n.a.

<事例４>	
インタビュイー	地域の人に喜んでほしい。気仙沼が好きで、その為に来たという思いを伝えたい
新郎新婦	上記に同じ
周囲の人	「白いネクタイを着られて嬉しい！」「震災があったからこその出会い。『おめでとう』と言う相手が増えて良かった」
友達・家族	数年経った今でも「あの時の結婚式楽しかったね」と言ってくれる人がいる（O氏の意見の元）

<第 5 章>

コミュニケーションの場としての結婚式

第 4 章で取り上げた事例から、結婚式がコミュニケーションの場となっていることが考えられる。U夫婦の事例のように、今まで会っていなかった人と結婚式をしたことで再会できたことや、O氏のように地域の人々を招待し、街全体で結婚式を作り上げるなど式に参加した人と多くのコミュニケーションの場が生まれると考える。

その中で、結婚式ではないがコミュニケーションを通して前を向くきっかけとなったSt氏とK氏の事例がある。

5－1　長年背負った苦しみとコミュニケーション

まず初めに、St 氏の事例について記していく。St 氏は震災後、避難所生活や周りの人の影響で何年間も心の内を人に話すことが出来ず、重荷を抱えてやんでしまっていた。

そんな中、2021 年に NHK 連続テレビ小説として放送された「おかえりモネ」のエキストラとして参加した。撮影の中に震災時のシーンがあった。その際に初めて震災について人に話すことができ、その瞬間に「やっと(人に心の内を)話せた」という思いで長年の悩みを晴らすことができた。St 氏は長年背負ってしまった重荷を人とコミュニケーションをとることによって下ろすことが出来た。

もし結婚式に参加する機会が St 氏にあり、人に気持ちを打ち明けることができればこれほど長い時間を苦しむ必要はなかったのではないだろうか。また、St 氏は「避難所生活中では、悪いニュースばかりでつ

らかった。気を紛らわせられる“何か”が欲しかった」と語っていた。そのような暗いニュース等からの脱会にも、結婚式を行うことによってつながるのではないかと考える。

５－２　一人じゃなかったからこそ前を向けたこと

（1）避難所生活と笑い声

次にＫ氏の事例について記していく。Ｋ氏は元ホテル望洋の社長を務めていた。震災後、ホテル望洋に 250 人程の避難民を受け入れた。後に避難民を受け入れたことでホテルを一次避難所とし、Ｋ氏は約 70 日間に及ぶ避難所生活の中の管理運営者となった。震災によって絶望や喪失感、今度どうなるかわからない不安で眠れない日々が続いていた。電気などのライフラインが普及していない夜の避難所では、人がいるかどうか、生きているか死んでいるかもわからないほど静かだった。

それらが一週間・二週間経ったある日、ろうそくの明かりが漏れた部屋から人の話し声と笑い声が聞こえてきた。Ｋ氏はその笑い声を聴いて、今まで「何とかなるよ」と被災者同士で声を掛け合っても変わらなかった気持ちや不安が、「なんとかなるんだな」と、ふと思った。

(2)被災者と非被災者

ある日、復興支援として来てくれた若者たちが音楽を流しながら掃除している姿を見た。Ｋ氏はその姿を見て「不謹慎だ」と感じたが、なぜか自身の中に得体の知れない“自信”が湧いてきた。今後の事を考えると不安ばかりだったが、その若者の姿をみて「きっと大丈夫だ」と思えた。

その後、K氏は復興支援として来てくれた若者と共に、食事をした。その際に、会話の中で若者は将来どうなりたい等、未来の話をしていた。この当時についてK氏は「お年寄りは昔の話をする。『震災前の気仙沼は良かったなぁ』と泣いて会話が終わってしまう。昔に戻るのではなく、自分を駆り立てて前に進まなければ人生も自分も、仕事も生活も変わっていかない。階段を上れば景色が変わるように、心の景色も変わってくる」と語った。また、「周りにはいつも若者がいた。だから元気をもらえた。音楽、夜の笑い声、一人じゃなくてみんなで避難所にいたからこそ前向きになれた」と語っていた。

震災がなければ、感じない当たり前に日常にあふれている音楽や被災者になかったまっすぐ未来だけを見ている若者の姿がK氏の心に響いたのだ。

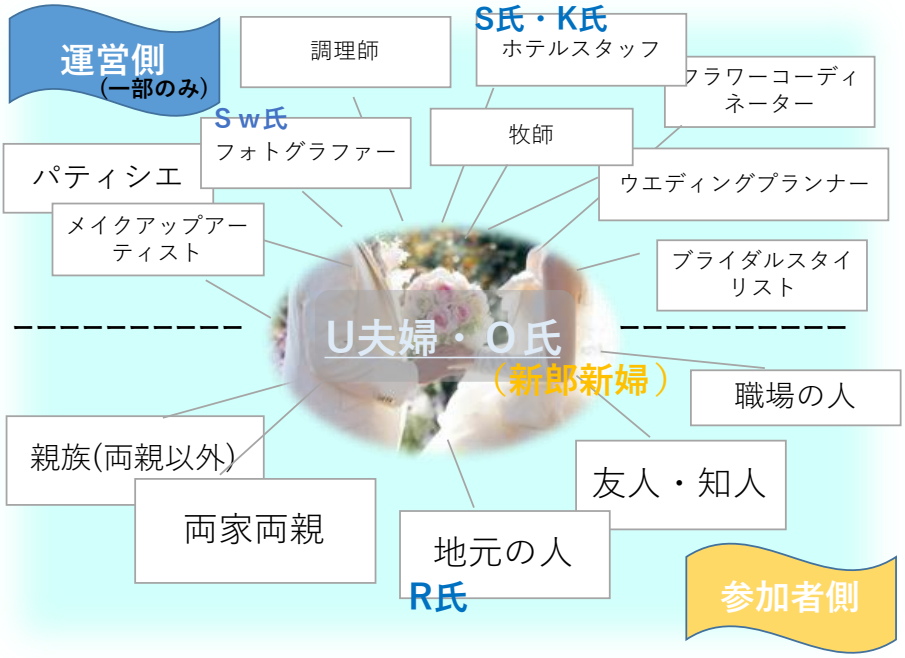

図1　インタビュー者それぞれの関係性と結婚式での仕事

表３　生活再建・前を向けたきっかけ

名前	生活再建・きっかけ
Ｓｗ氏	Sw 氏ではないが、(被災者が)結婚式に参加したことによって、最初は不謹慎だと結婚式を批判していたが、1，2 年後に「やってよかった。2，3 時間とわずかな時間でも笑える時間になった」と思えたこと。
Ｓ氏	ボランティアに来た人が「気仙沼は良いところだね」という言葉を聞き、今までの生活の幸せさに気づいた。それを機に気仙沼への思いが大きくなり、前向きに復興へ向けて行動するようになった。この時に結婚式の依頼があり、これがＳ氏にとって震災後初の仕事となったこと。
Ｕ夫婦	出産のために、前に進むしかなかった。泣いている暇がなかった。U 夫婦にとって結婚式は長年会えていなかった知り合いとの再会、将来子供に見せることができる代えがたい思い出となった。また、明るくなれるもの、前向きに人を笑顔にするものとなった
Ｏ氏	Ｏ氏震災の直接な被害者ではない。しかし、結婚式の参加者にとって結婚式は今までほとんどなかった白いネクタイをつける機会となったこと、街全体で作り上げることで仕事として関わる人が増える点、参加者(運営者含め)全員の共通の思い出ができる点が前をむけたこと。
St 氏	「おかえりもね」のエキストラに選ばれた際に、初めて人に長年背負った心の内を話すことができたこと
Ｋ氏	ずっと音がなかった避難所生活の夜。震災から数週間後に初めて聞こえた部屋からの笑い声を聞いて「なんとかなる」と思えたこと。また、ボランティアに来てくれていた若者の笑い声や未来だけを見ている姿、若者が音楽を流して楽しそうにしている姿を見て「きっと大丈夫だ(今後のこと)」と思えたこと

<第 6 章>

考察

これまでのインタビューを通して、被災地での結婚式は前を向こうと努力している人、なかなか前を向くことが出来ない人や仕事を再開させたい人、暗いニュースばかりで辛い人・辛い気持ちを打ち明けたい人・被災によって予定していた結婚式が挙げられなくなってしまった人など被災者にとって必要とされる場面が非常に多く含まれていると考える。そのため、被災者それぞれの前を向くきっかけとなる要素・場面があるとすれば、結婚式は多くの人にとって、被災を乗り越え、前を向くためのひとつの機会になり得るのではないだろうか。

そこで第 4・5 章で記した事例を通して、被災地の結婚式が人々にもたらす意義は、以下の 3 点として整理できる。

６－１　生活再建のきっかけ

まず 1 つ目に、生活再建のきっかけが挙げられる。これは、S 氏の事例から言えることである。実際に S 氏は結婚式が震災後初の仕事となった。S 氏以外にも結婚式に関わる仕事は、Ｓｗ氏と同じフォトグラファーや、図 1 のようにウエディングスタイリスト・ウエディングプランナーなどがある。他にも調理師や食材を販売・運搬する仕事、S 氏の話の中にあったステンドグラス屋など、直接結婚式に関わらない仕事なども含めると数えきれないほどある。

このことから、結婚式を 1 回実施するだけで何百という人が関わるのではないかと予想する。つまり、何百という人が震災によって強制的

に絶ち切られてしまった仕事の再開につながるのではないかと考える(他県の企業等の介入があるか否かでも変わってくるが)。震災以前まで生活の一部となっていた仕事が、結婚式を機に再開することで生活再建のきっかけとなると考える。

６－２　コミュニケーションの場

次に 2 つ目として、結婚式がコミュニケーションの場になっていることが挙げられる。これは第 5 章のはじめで挙げたように、U 夫婦の事例やO氏の事例から言える(長らく会えていなかった友人・知人との再会や親族以外の地域の人など、大勢の人を式に招待したなど)。

そもそも、被災地ではない一般的な結婚式においても、非常に多くのコミュニケーションの場が結婚式の中に含まれていると考える。

表２のように、新郎新婦の挨拶や歓談、両親への挨拶など結婚式の中で多くのコミュニケーションの場があると考えられる。また、結婚式の準備の段階でもプランナーと式の計画を立てたり、衣装合わせ・写真撮影など式場スタッフとの会話が必ず必要である。

表２ 結婚式の一般的プログラム

プログラム	所要時間
ゲストの入場	披露宴開始の約 10 分前
新郎新婦入場	約 5 分
開宴の挨拶	約 5 分
新郎新婦紹介	約 5 分
主賓挨拶	約 10 分
乾杯	約 5 分
ウエディングケーキ入刀	約 10 分
＜歓談と食事がスタート＞	

ゲストのスピーチ	約 10 分
新婦・新郎お色直しの退場	約 30 分
新郎新婦再入場・キャンドルサービス	約 10～20 分
ゲストによる余興	約 20 分
祝電の紹介	約 5 分
親への手紙／記念品・花束贈呈	約 10 分
謝辞	約 5 分
閉会の辞、新郎新婦の退場	約 5 分
ゲストの退場、お見送り	約 30 分

(出所)マイナビウエディング

他にも、S 氏が「できることを何でもしよう」と前を向くきっかけとなったのも人とコミュニケーションをとったことがきっかけである。また、K 氏が若者の明るさや未来を見据えている姿を見て、前を向けた話や St 氏のように長年背負った重荷を下ろすことが出来たきっかけもコミュニケーションだと言える。

人と接し、話し合うということが被災者にとってどれほど良い影響をもたらしているのかが分かる。また、結婚式の中で多くの人と接する機会がある点や、知人・友人との再会につながるという点、S 氏のように結婚式や気仙沼市の復興を通してもともとのつながりが強くなったという点など、結婚式は被災者にとって必要な要素が多く含まれる行事であり、特にコミュニケーションの場としての意味は大きいと思われる。

6－3　被災者にとって共有できる大切な記憶

最後に 3 つ目として、結婚式が振り返ることができる記憶となることである。これは U 夫婦の「子供に見せることができる思い出がで

きた」という言葉や、O氏の「みんなと共通の思い出ができた」という話から言えることである。また Sw 氏の事例にあるように、1，2 年後に「2，3 時間とわずかな時間でも笑える時間になった」と参加者が言っていたのもその１つである。

何よりも被災者が結婚式を実施・参加したことで、「やってよかった」と口に揃えて言っている点においても、式が良い影響を与えたと言える。その言葉の中には、もうできないと思っていた結婚式ができたこと、久しぶりに笑顔が見ることが出来たこと、生活再建や前を向くきっかけになった等、人それぞれの思いや意味が含まれている。それだけではなく、実際に表立って言えなくとも、結婚式を挙げたい・必要としている人が予想していたよりも多いと考える。震災後すぐに結婚式を実際に挙げている人がいるという事実に加え、桂由美氏の公開結婚式の応募数が約 120 組あった。このことから、結婚式を必要としている人が非常に多いと言える。そこには、ご両親の為、家族の為、子供の為と様々な理由があると考えるが、結婚式を望んでいる人が全員実施することが出来れば、より多くの人が前を向くきっかけに必ずつながると考える。

また、K氏の印象に残った言葉がある。「被災地での結婚式は不謹慎だと言われたりもする。しかし、やっていいんだ・笑っていいんだという気持ちになることがむしろ復興になる。振り向いていたって始まらない」。

東日本大震災発生直後は、「不謹慎だ」「亡くなった人もいるのに明るいイベントをするのは失礼だ」等の否定的な意見や、「生き残ったからこそできることをやるべきだ」「前を向いて生きていくべきだ」と肯定的な意見があった。結婚式は非常に賛否両論あるが、いつか「やって

よかった」と思える人が実際にいるという点で必要なことだと考える。

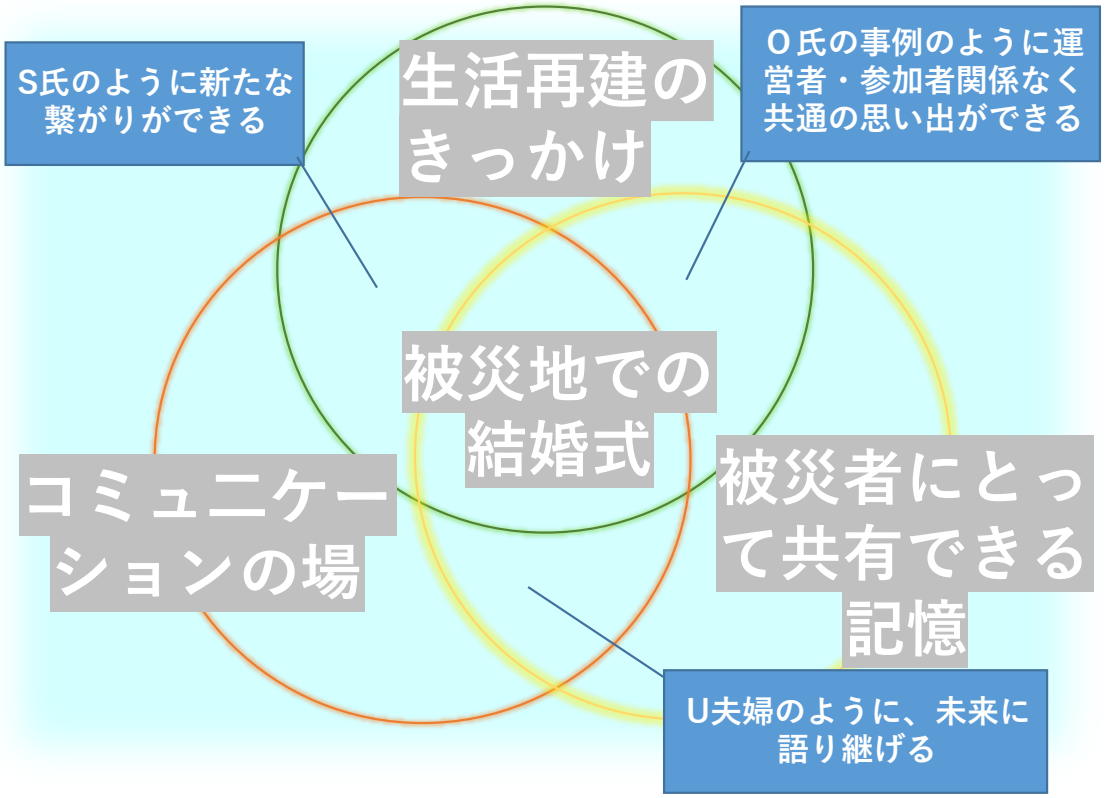

図２　被災地での結婚式が被災者に与えた意義

<第７章>

結論

７－１　まとめ

日常を取り戻していくひとつのきっかけとしての結婚式の意義は３つある。１つ目は、生活再建のきっかけとなる仕事の再開である。２つ目は、結婚式を通してコミュニケーションをとることで前向きになれる点である。最後に被災者にとって暗く辛い思い出だけではなく、振り返ることができる明るい記憶ができる点である。

被災地での結婚式は賛否両論あるが、実際には被災者にとって良い影響をもたらしていることも多いと言える。震災によって気持ちや日常が停まってしまった中で、結婚式を行うことによって仕事の再開につながったことや、前向きになれたと語る人が非常に多くいると考える。また、結婚式を当時批判していた人々も、数年経って心に余裕ができた際に「やってよかった」と語っている点においても、結婚式が良い影響を被災者に与えていると言える。

被災地での結婚式は、実施した当初はわからなくても、数年後に当時を振り返った時に生活再建のきっかけとして、また笑顔を取り戻すことが出来た良い思い出として人々に残っていく。そんな影響力が結婚式には秘められているのではないかと考える。被災者にとって、結婚式が良い意味での節目、日常の再スタートの役割になればと考える。

７－２　今後の展望

１つ目は結婚式が生活再建のきっかけになるのは確かだとしても、他県が常に介入できるわけではない。つまり、被災地内だけでは十分な

実施体制が見込めない場合がある。実際、今回取り上げた結婚式の事例の中で、他県の企業の力を借りていることにより実施できている地域もある。そのため介入する企業がいない等、地域のみで開催を要される場合(他県の介入が必要な地域では)震災からどのくらいの準備や復興期間が必要となるのかを調査することが求められる。

第 2 に、結婚式がコミュニケーションの場や前を向けるきっかけとなることが確かであれば、結婚式を望んでいる人が全員出来れば、前向きになれる人がさらに増えると考える。今回の桂由美氏の結婚式の例は募集式で、抽選が当たらず結婚式が実施できなかったカップルも多くいる。もし、結婚式をしたいと考えるカップルが全員平等に実施できるにはどのくらいの人数・時間・資金・支援等が必要となるのか。また、どのくらい実施可能かという疑問を解消していくことが求められる。

第 3 に、今回の調査で被災直後の結婚式には賛否両論の意見があるということがわかった。その上で、否定的な意見に関してもさらに丁寧に取り上げていく必要がある。

最後に、結婚式は開催する為に多くの人や職業が関わる協働事業だと言えるが、だとしたら、それ自体が被災地の生業の回復につながっている可能性がある。そうした実態についても明らかにできれば、より結婚式というイベントが持つ意義を確認することができると考える。

<謝辞>

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご協力いただきました。

インタビュー調査にご協力いただいた気仙沼市・大槌町・その他のみなさまに関しましても、心から感謝いたします。

最後に田中正人教授には、研究の着想、調査、論文執筆まで多くのご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

<補注>

１）行方不明者 413 人のうち、死亡届け未受理 1 人を含む。

２）ウーマンリブとは、1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて起こった女性解放運動のこと。主にアメリカ、ヨーロッパ、日本でおこった運動。

３）桂由美氏は、ウエディングデザイナー、実業家である。また、株式会社ユミカツラインターナショナル社長、株式会社桂由美ウエディングシステム社長、全米ブライダルコンサルタント協会名誉会員、アジアブライダル協会連合会会長、NPO 法人地域活性化支援センター理事、アジア・クチュール協会創立メンバーである。また、阪神淡路大震災、中越地震の際にも被災地にて公開結婚式を実施した。「明日への夢を被災地にも育てる」という言葉を掲げ、何千何万という被災者を勇気づけた。

４）公開結婚式は、全日本ブライダル協会会長である桂由美氏が監修した、震災による被災者のための結婚式である。U 夫婦の事例で紹介した結婚式の他にも、福島県や宮城県でも開催している。この結婚式はシビルウエディング(市民結婚式)を被災者へのプレゼントとし、桂由美氏が多くの新郎新婦に幸せと被災者の一日でも早い復興を願って開催されたものだった。(一般社団法人　全日本ブライダル協会)

５）U夫婦はこの当時、婚姻届けを受け取りに役場へと向かった。しかし、役場も被災していたため、受け取ることが出来ず公民館へと向かった。そこには、死亡届を取りに、多くの人が列をなしていた。この言葉だけで、当時の被災状況・震災の恐ろしさが手に取って伝わってくる。

U夫婦は無事に婚姻届けを受け取ることが出来たが、そもそも用紙もなく、コピー用紙での受理となった。婚姻届けを取りに来たのは、U夫婦が二組目だったという。

６）正式名称は、公益財団法人日本財団。

７）御崎神社は、宮城県気仙沼市唐桑半島の最南端にある神社。1000年余りの歴史を持ち、地元の船乗りたちに「おさきさん」の名で親しまれ、信仰されている神社。(気仙沼さ来てけらいん)

８）宮城県気仙沼市にあるサンマリン気仙沼ホテル観洋。

９）オイカワデニムとは、大手メーカーのジーンズの縫製などを主な事

業とする宮城県気仙沼市の小さな工場。東日本大震災により被害に合い、約 5000 本のジーンズが津波に流されてしまった。しかし、瓦礫の中から見つかった約 40 本のジーンズはほころびもない状態で見つかり、「奇跡のジーンズ」と呼ばれ話題を呼んだ。(公益財団法人 民間放送教育協会)

１０）松圃虎舞が旧唐桑町に伝承されたもの。御崎神社の例祭に、航海安全や大漁を祈願して奉納されてきた。また当地の生活と結びついて発展した芸能である。(宮城県)

<引用・参考文献>

一般社団法人全日本ブライダル協会「市民結婚式をプレゼントします」
https://ajba-civil.or.jp/ajbaold/topics_back/topi201107_1.html
(2022 年 12 月 13 日アクセス)

植田今日子(2013)「なぜ大災害の非常事態下で祭礼は遂行されるのか―東日本大震災後の『相馬野馬追』と中越地震後の『牛の角突き』―」社会学年報　No.42、pp.43~60

梅原明彦、沼田宗純、目黒公郎(2014)「効率的かつ遺族心理にも配慮した巨大災害時の遺体処理業務プロセスの提案」66 巻 4 号　pp.71～74

大槌町行政サイト「人口情報」(更新日：2022.11.30)

https://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/
(2022 年 12 月 13 日アクセス)

大槌町行政サイト「東日本大震災人的被災状況」(更新日：2020.9.15)
https://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/434832.html
(2022 年 11 月 15 日アクセス)

警察庁データ「平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震の警察措置と被害状況」(2022)
https://www.npa.go.jp/news/other/earthquake2011/index.html
(2022 年 11 月 1 日アクセス)

気仙沼市役所　「被害の状況(令和 4 年 3 月 31 日現在)」(更新日：2022.4.14)
https://www.kesennuma.miyagi.jp/sec/s009/020/020/020/1300452011135.html
(2022 年 11 月 11 日アクセス)

気仙沼市役所データ「人口と世帯数」(更新日：2022.11)
https://www.kesennuma.miyagi.jp/li/shisei/010/010/index.html
(2022 年 11 月 11 日アクセス)

気仙沼さ来てけらいん「御崎神社　祭典」(更新日：2021 年 1 月 4 日)
https://kesennuma-kanko.jp/osakireitaisai2021/

(2022 年 12 月 13 日アクセス)

COCOSAB「宮城県の結婚式の伝統としきたり」(更新日：2019 年 1 月 9 日)
https://www.cocosab.com/wp/local-wedding/touhoku/
(2022 年 12 月 10 日アクセス)

公益財団法人 民間放送教育協会「一＃31　奇跡のジーンズ　ふたたび～気仙沼に青い風が吹く～」
https://www.minkyo.or.jp/program/nippon_no_chikara/031/
(2022 年 12 月 13 日アクセス)

斉藤美奈子(2006)「冠婚葬祭のひみつ」岩波新書

産経新聞「救った命と救えなかった命　宮城県南三陸町・高野会館、石巻市・大川小学校」(更新日：2019.3.10)
https://www.sankei.com/article/20190310-ZDVGADR7SJKFXI673VWNR6CUGM/
(2022 年 11 月 27 日アクセス)

杉浦康広（2021)「結婚披露宴におけるスタイルの変化と今後の動向に関する考察」　目白大学短期大学部研究紀要、第 57 号、pp.41~54

彭永成（2020)「結婚情報のメディア史－雑誌『ゼクシィ』を中心に－」

京都大学大学院教育学研究科紀要、第 66 号、pp.275~288

マイナビウエディング「結婚式・披露宴の進行と流れ&各プログラムの所要時間を解説！」
https://wedding.mynavi.jp/contents/press/detail/post-51/
(2022 年 12 月 11 日アクセス)

宮城県「宮城県指定文化財に指定されました」(更新日：2017 年 2 月 21 日)
https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/bunkazai/shitei170221.html
(2022 年 12 月 13 日アクセス)

りょうすけのありのまま記「忘れたくない、気仙沼での結婚式の話」(更新日：2018 年 11 月 15 日)
https://note.com/tara/n/n7ac84029171b
(2022 年 8 月 10 日アクセス)

WONDER PAINT「北海道・東北に残る伝統的な結婚式」(更新日：2016 年 5 月 11 日)
https://wonder-paint.com/wedding_note/howto/3673/
(2022 年 12 月 10 日アクセス)